

構築主義の国際政治学：実証主義とポスト構造主義の間

大賀， 哲
九州大学大学院法学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/2230990>

出版情報：法政研究. 85 (3/4), pp.57-83, 2019-03-08. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

構築主義の国際政治学

—実証主義とポスト構造主義の間

大 賀
哲

はじめに

一 なぜ構築主義が問題となるのか

二 社会科学における構築主義

三 国際政治学における構成主義

四 国際政治学における言説分析—理論史から事例研究へ

五 構築主義の分析射程—構築するもの・構築されるもの・構築されざるもの

結び

はじめに

構築主義 (Constructivism)^① という概念が社会科学の幅広い領域で採用され、定着してから既に久しい。国際政治学の分野でも一九八〇年代以降、構築主義を盛り込んだ広範な議論及び既存の理論の読み直しが起こっている。しかし、構築主義という概念が包括する理論的領野は恐ろしく広く、国際政治学でも実証系、ポスト実証系、ポスト構築主義、言説分析等と異なったアプローチが異なった構築主義を採用している。しかしながら、構築主義と題する研究が多い割には、それぞれの学派がそれぞれ異なった概念で構築主義を用いており、いったい構築主義とは何なのか？それはどのような方法論によってアプローチ可能であるのか？更に各々のアプローチがどのような長所・短所を内在しているのかについて体系的な整理は未だ為されていないのが現状である。各々のアプローチが各々のコンテキストに合わせて自己流の構築主義を掲げて、個別に議論を繰り広げ、アプローチ間の対話は没交渉の状態にある。^②換言すれば、各アプローチが構築主義という学術的潮流に乗りながら学派間分業を行っている「合意なき量産」状態にあると言えよう。^③

そういった学派間分業の最も顕著な例が国際政治におけるアイデンティティ研究である。構築主義の波が国際政治学に波及して以来、アイデンティティの構築過程を照射した研究は非常に多く、国際政治空間の中でアイデンティティがどのように構成されるのか、或いは構成されないのか、について既に数多くの研究業績が生産されている。しかし、その反面、アイデンティティの概念や用法は分野間で没交渉の状態であり、生産的な対話は今日までなされていない。

これは特定の対象が構築される過程、及びその過程を知るための方法論について、整理された議論が存在しないことに原因がある。本稿の趣旨は多種多様な広がりを持つ構築主義の系譜を明らかにし、更にその主要な方法論である実証分析と言説分析の方法論的な妥当性を検討することにある。方法論的な文脈で言えば、国際政治学の分野でも構築主義を用いた研究は既に相当な蓄積があるが、それを方法論的に体系化したものは非常に少ない。本稿では実証研究と言説

分析のフレームワークを比較しながら、実証主義や言説分析のアプローチがどのように国際政治学研究に寄与しうるのかを考察していく。

本稿では以下六節から論を展開していく。第一節では構築主義の問題枠組みを定義する。つまりなぜ構築主義という課題が社会科学において問題となるのかを吟味する。その上で第二節では社会科学における構築主義研究の系譜を辿っていく。主に「社会問題の社会学」「物語論」「身体論」の三つの角度から構成主義の学問的系譜を明らかにしていく。第三節では国際政治学における構築主義の展開を俯瞰する。更に第四節では方法論としての言説分析が国際政治学でどのように展開されているのかを検討する。最後の第五節では、以上の議論を踏まえた上で構築主義の分析射程を考察する。一方で構築主義は構築するものからされるものへ、そして構築されるものから構築するものへ、という二重の運動である。しかし、他方では構築する／される主体を主題化しすぎることによって、特定の要因を排除してしまう危険性も孕んでいる。つまり構築主義には常に「構築する／されるもの」と「構築されざるもの」との光と影の緊張関係が内在している。この節では、構築されざるものという射程から構築主義の限界とそれを是正するための処置を検討していく。更に、実証研究と言説分析を架橋する可能性についても模索していく。

一 なぜ構築主義が問題となるのか

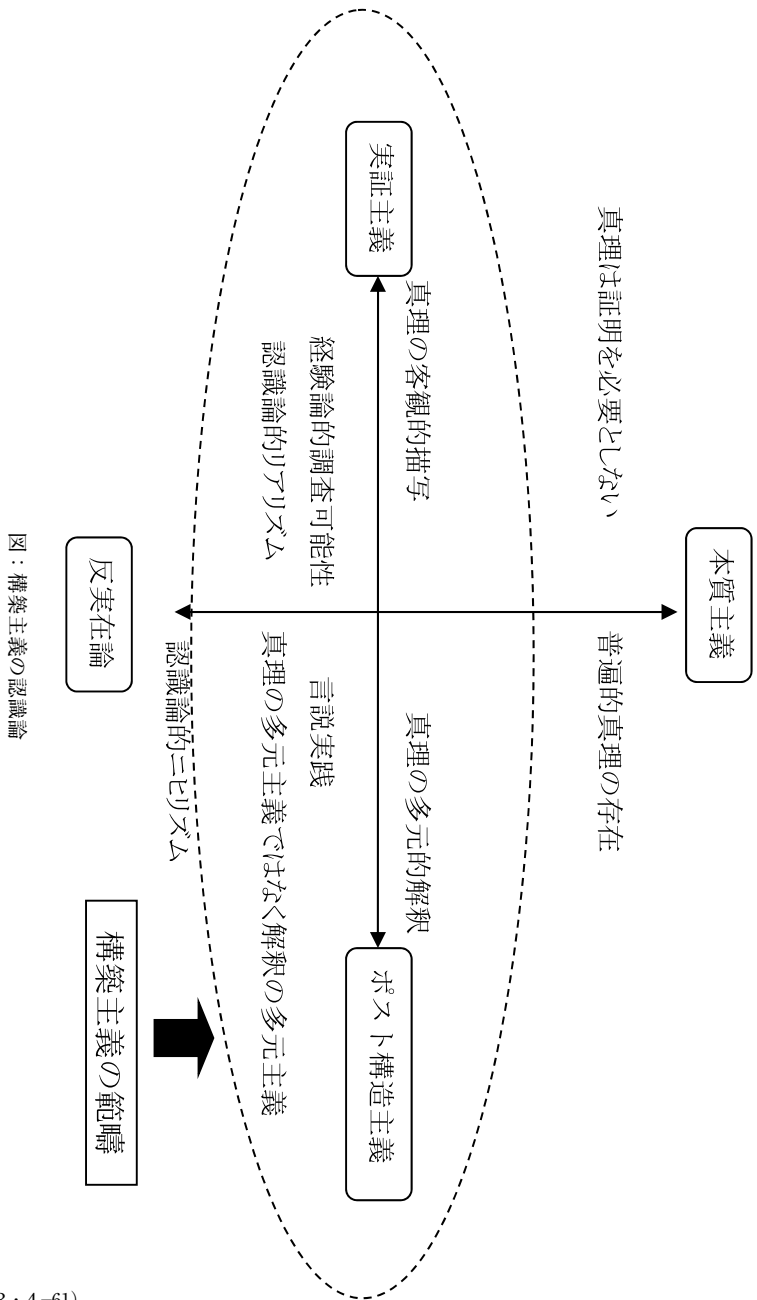
理論上、方法論上、なぜ構築主義が問題となるのか。本節では、ややメタ理論的な視角から構築主義の認識論を整理し、その上で構築主義研究に典型的に現れやすい一次理論／二次理論、経験論的調査可能性、オントロジカル・ゲリマンドリングなどの問題を検討する。

(一) 構築主義の認識論

構築主義とは基本的には本質主義のバイアスを排除して、真理や本質が社会的に構築されるという立場である。しかしながら、真理や本質が社会的構築物であるとしても、それがどのように構築されるのか、その形成過程をめぐって広範な理論論争が繰り広げられている。それぞれの立場による構築主義の差異を正しく理解するためには、いくつかの用語とそれぞれの前提を整理するという手順を先に行わなければならない。普遍的真理の存在を同定するか否かで本質主義と反实在論は区別されるし、客観的な記述と多元的な解釈が可能か否かで実証主義とポスト構造主義は区別される。しかし実際には本質主義と実証主義、反实在論とポスト構造主義を混同した議論は多い。これらは構築主義を思考する上で避けない用語群であるが、しばしば混同され矮小化されている。具体的にはそれらは、先述のように本質主義／反本質主義の軸（記述を一意的に同定可能か否か）と实在論／反实在論の軸（記述対象が存在するか否か）を混同しているのである⁵⁾。少し詳しく見ていこう。しばしば混同されがちな構築主義の認識論を示したものが次頁の図である。

まず本質主義と実証主義をみていこう。言うまでもなく本質主義は実証主義的である必要はないし、逆もまた然りである。本質主義とは、この世界にはアприオリな真理（＝本質）が存在し、その真理を探究することによって世界を捉えていくことができるという立場である。また実証主義とは経験論的調査可能性（empirical researchability）を媒介として、経験的に証明可能な事象を積み上げていけば、客観的に世界を記述することが可能であるという立場である。真理の可変性を認めないような極端な本質主義は確かに構築主義とは相容れない。他方で、実証主義は必ずしも構築主義と相反した立場ではない。なぜならば、経験論的調査可能性の領域―つまり経験的に証明可能な事象の質と量―は絶えず更新され続けていくので、実証主義にもまた構築主義的な側面があると主張することは可能である。

次は反实在論とポスト構造主義である。反实在論とは物理的世界と人間の認識的世界は不可分であるとの出発点か



ら、認識に先立つあらゆる事実、本質、真理の存在を否定する。つまり、真理が存在するのではなく、人間の認識によって形成・捏造された真理が存在するという立場である。つまり実証主義に認識論的リアリズムがあるとすれば、反实在論にあるのは認識論的二ヒリズムの思想である。更にポスト構造主義の立場は、真理に対する多元的な解釈——つまり真理というものが存在するとしても、その真理に対する解釈は多元的であり、その解釈がまさに時代や状況によって彼らが言説実践と呼ぶものを媒介として構築されていく——という思考法である。ポスト構造主義は広義には価値評価の多元性を認める立場であるので必ずしも反实在論や認識論的二ヒリズムを採用する必要はない（真理が実在するか否かと、そこに一意的な解釈が可能であるか否かは別問題である）⁽⁶⁾。

更に言えば、これらの認識論的立場というのは零か一かではなく、実際にはもう少し多層的な議論である——たとえば自らの記述を永久不滅の真理であると考えた実証主義者が少数であるように、現実はずべて虚構であると本気で考えているポスト構造主義者は例外的な存在である、程度のことは言うるであろう⁽⁷⁾。つまり、絶対的な本質主義を取らない立場は特定の事象に対する観察結果、価値や解釈が可変的であるという意味においてすべて構築主義の範疇に含まれる。他方、世界はすべて虚構であるという極端な反实在論も定義上、（本質は存在しえず社会的に構築されるという意味において）構築主義に含まれるが、構築主義のなかでそうした議論が多数派を占めているわけではない。

しかしながら、価値や解釈が社会的な構築物であるとして、それを指摘するだけでは何も説明していることにはならない。価値や解釈が社会的に構築されるとして、それがどのようにに構築され（理論的レベル）、且つどのようににそれを我々が捉えることができるのか（方法的レベル）が明確にされなければならない。以下、構築主義の研究に顕著に現れがちな問題点を中心に是正されるべき課題を検討していく。

（二）一次理論と二次理論

第一に理論的なレベルで見た場合に社会的な構築がどのように行われ、それが現実世界とどのような相関関係にあるのかが解明されなければならない。ここではその相関関係を盛山和夫の一次理論／二次理論を補助線としながら検討していく。⁽⁸⁾

一次理論とは行為者が抱いている意味世界一般（およびそこにおける了解・認識・認知・言説・規範等）を意味しており、二次理論とは一次理論により構成される意味世界を科学的・客観的に探索しようとする（観察可能な現象とした把握しようとする）ことである。言い換えれば一次理論とは理念的実在であり、二次理論とは観察を可能とするような経験的な実在である。それ故に一次理論とは直接目で見たり観察したりできるものではない。例えば、ある男が斧で木を切っている場合、真に観察可能（＝二次理論）なのは「斧を振り上げて木に振り下ろした」という行為である。それが「木を切っていたのか」「単に運動していたのか」「単に木を傷つけていたのか」はその男の意味世界の範疇であり一次理論である。⁽⁸⁾

おそらく極端な行動科学の立場を採る研究者を除けば、一次理論の存在を否定する者はいないであろう。しかし、ここで「一次理論の擬似二次理論化」⁽¹⁰⁾という問題が起きる。つまり研究者が一人の研究者として持っている一次理論を、客観的な事象として二次理論的世界に密輸してしまうという問題である。換言すれば、研究者の個人的バイアスが二次理論レベルに反映されてしまうということは起こりがちであるし、特定の事象の構築過程を観察者が恣意的に操作してしまうということは十分に想定可能な問題である。例えば反戦運動を例に取ると、ある行為者の集合を反戦運動として同定してしまうことが問題なのである。一次理論レベルで考えれば個々の行為者は、たまたまの通りすがりであるかもしれない、友達に誘われただけかもしれない、そして戦争に反対するためにそこに参加したのかもしれない。しかし二

次理論のレベルで観察可能なのは行為者の集まりだけである。しかし、ここで「反戦運動のために行為者がそこに集まった」という同定を行うことは厳密に言うとは観察者自身の一次理論的世界を経験論的な二次理論世界にそのまま持ち込んでいるに過ぎない。

このような観察者のバイアスはなぜ問題なのか。勿論、一次理論と二次理論の境界を厳密に切り分けることは不可能であるが（観察や記述という作業には多少なれ少なかれ研究者自身のバイアスが入る）、両者の区別を無視することは経験論的調査可能性やオントロジカル・ゲリマンダリングが孕む方法的な問題を生じさせ易くなる。そして一次理論の存在を無視或いは軽視しがちな実証研究においてはこの問題はとくに発生しやすくなる。

（2）経験論的調査可能性と言説実践

では実証主義研究とポスト構造主義（または言説分析）はどのように構成主義を捉えているのか。実証主義系構築主義の多くは、アイデアやアイデンティティを他の物質要因と同様に「モノ」として考察しようと試みている。すなわちアイデアや言説といった要因に経験論的調査可能性という補助線を引いているのである。この根底にある哲学は、社会を貫く意識や言説は調査不可能であるが、その結果として現れた具体的な活動や社会活動は調査可能であるという認識である。¹¹⁾

対して言説実践の要点は、現実の言説構成を認める点にある。つまり真に客観的な言明は存在しえず、どのような言語でどのように世界を描写するのか、その選択の中に既に権力／知の関係への参与のあり方が内在している。構築主義というヴァリアントの中で言説実践を捉えた場合に「名付けの政治学」「定義の政治学」が露わになる。

社会に流通する言説は政治的・社会的な位相でその意味が構成・再構成される。そしてその再構成の過程である言説に新たに名前が付与されたり、新たな定義が生まれたりする。しかし、この言語構築の過程こそが社会的排除の過程で

もある。フーコーが指摘するように病名を名付けることに暴力が内在していて、名付けによって患者の存在が明らかに⁽¹²⁾なる。これを社会的な文脈で捉えた場合、例えば「らい予防法」という法律が制定されることによって「ハンセン病患者」が名指しの暴力へと晒されていく。それ以前にもハンセン病患者への差別や排除は存在していたが、この名指しの暴力によってハンセン病患者／非ハンセン病患者という明確な境界線が引かれていく⁽¹³⁾。

言説分析はこうした言説構築における政治性の暴露には敏感だが、実証主義系構築主義の研究はこうした「名付けの政治学」「定義の政治学」の問題を避けられない。なぜならば、新たなカテゴリーを「構築されたもの」と看做することによってそこから排除される主体が現れるからである。こうした排除が起きてしまうのは、実証主義研究がフーコーやデリダを出自とする言説や脱構築という概念をかなり過少に評価し、単なる認識や評価の変容として捉えているからである。実際にフーコーやデリダが意図した射程は認知や評価に止まらず、認識対象それ自体を管理・統制している指令モード（＝権力／知の体系）の脱構築である⁽¹⁴⁾。しかし実証主義は概念の構築を「指令モード」として捉えないためにこうした「名付けの暴力」の文脈に対しては徹底的に無防備となる。

そしてこれは形を変えた「一次理論の擬似二次理論化」である。「指令モード」に無頓着であるが故に一次理論世界の排除やバイアスを客観的な認知・評価体系としての二次理論的な世界に持ち込んでしまうのである。

（二） オントロジカル・ゲリマンダリング（存在論的境界の恣意的線引き）

更に実証主義研究にはオントロジカル・ゲリマンダリングという方法的な問題も存在する。ウルガー＝ポーラツは構成主義におけるオントロジカル・ゲリマンダリングの問題を指摘した⁽¹⁵⁾。社会問題の活動や現象を調査する過程で、その背景にある言説や定義を同定し、特定のフレームが構築されたとの判断を恣意的におこなっているという指摘であ

る。つまり説明対象を規範や言説による価値実践と捉えながら、その構築過程の記述は依然として利害関係や因果関係といった客観的科学論に依存し、特定のフレームで価値判断を行ってしまっているのである。彼らの多くが存在論的に価値や規範に目を向けながらも、認識論的には依然として科学的実証主義から抜け出さないのはその典型的な例である。多くの実証主義的分析はアイデアやアイデンティティといった観念を、物質秩序と同様に経験的或いは計量的に測定可能だと捉えている。すなわち、主権概念、人権や脱植民地化等の特定のアイデアの変遷や史的文脈を分析していけば、それらのアイデアの変容から政治分析が可能であるという立場である。彼らが参照するアイデアの変容は多くの場合、脆弱な方法論によってしか説明がなされない。それは多くの場合、事例的解釈に頼りきっている（主権国家の概念や脱植民地化、民主主義や人権概念の定着と付帯）。⁽¹⁶⁾これでは分析者の視点という大きな偏差を持った解釈に過ぎない。⁽¹⁶⁾これも同様に一次理論／二次理論の境界に無頓着であることから生じている。一次理論の存在を否定し、客観的・経験的な二次理論の構築を目指す故に特定の認識（多くの場合は研究者個人の一次理論的世界）を理論構築や分析の過程に密輸しているのである。

それでは、こうした実証分析の問題を言説分析は回避することはできるのであるか。そもそも何かを説明するといふ作業には、ある一定の存在論的前提が不可避である。⁽¹⁷⁾それ故に言説分析においてもこうした問題を完全に取り除くことはできない、しかし言語構築の権力性に着目することにより問題を最小化することはできる。また研究者は社会現象を手にとって吟味することなどはできず、通常、研究者がアクセス可能なリソースはその現象から生まれた言説だけだから、言説実践を精密に分析すれば良いという開き直りもある。⁽¹⁸⁾更に研究者のアクセスが現象の言語的表象だけであるのならば、事実や真理の实在を想定することは「否定はしないけれどもリダンダントである」という指摘も理に適ったものだろう。⁽¹⁹⁾

二 社会科学における構築主義

前節では構築主義の理論的・方法的な課題について触れたが、では実際に構築主義研究は社会科学においてどのように発展してきたのか。構築主義の出自は社会科学における社会問題の研究である。では国際政治学に先立って社会科学において構築主義はどのように展開してきたのか。本節では主に社会科学における動向に目をむけ、社会問題研究・物語論・身体論の三つのアングルから構築主義の展開を考察する。⁽²⁰⁾

社会学の文脈で「構築主義とは何か？」を問うた場合、バーガー・ルックマンの以下の引用が正鵠を射たものである。「現実とは社会的に構築されており、知識社会学は、この構築がおこなわれる過程を分析しなければならない」⁽²¹⁾。しかしながら、この引用ではまだ何も説明したことにはならない。第一節でも触れたように、現実が社会的に構築されるとしても、それがどのようになされ、どのようなアプローチで解析可能なのかを示されていないからである。

ただこのアプローチという点に関しては、構築主義者に共通するアプローチというものは存在しない。構築主義者がとるスタンスに共通の座標軸などはなく概ね、以下の緩やかな要件を共有しているに過ぎない。①アприオリな知識への批判的視座（＝反本質主義）、②歴史的・文化的特殊性への配慮（知識の歴史性・相対性）、③知識が社会過程によって支えられているという認識（社会行為としての知識及び言説実践）、④知識と社会行為の相関関係（相互作用と過程への着目）⁽²²⁾。現実の社会的構築がどのようなアプローチによって解析可能であるのか、その検証は次節以降に譲るとして、本節では構築主義という問題系がその出自とされる社会科学の中でどのように展開されてきたのかを検証する。

(一) 社会問題の社会学

社会学において最初に構築主義が注目されたのは、社会運動の研究においてであった。この分野を切り開いたのはスベクター⁽²³⁾＝キツセである。彼らの研究のラディカルな点は、社会問題についての社会学者（＝観察者）のまなざしの持つ恣意性を暴露したことにある。社会問題において特定の価値や規範が共有されていた場合、その共有された価値・規範の分析においてそれを同定する社会学者の価値付けを抜きにしては語れない。そして、そのことがむしろ研究者が専門家としての知の定義権を乱用し、特定の道徳的判断を押し付けているのに過ぎないのではないかという指摘へと帰着する。

この視座はバーガー＝ルックマンの知識社会学の視座と比してラディカルな意義を有していた。即ち、バーガー＝ルックマンにとっては社会の中で構築される知識がどのような意味を持つのかという点が主眼であるのに対して、スベクター＝キツセは特定の知の経路を貼り付けるもの、特定のラベルを恣意的に貼り付ける知的権威にその焦点があった。言うまでもなく、この社会問題の社会学はオントロジカル・ゲリマンダリングの問題を招来せざるをえない。

(二) 物語論

もう一つのアンゲルに物語論の展開がある。物語論は、歴史学、臨床心理学、文化人類学の文脈でそれぞれ発展してきた。

① 歴史学

歴史学は過去をどのように再現しうるのかという課題である。その場合に記録され、語られる歴史が誰にとってのものであるのかという問いから歴史学は基本的には逃れられない。その状況下で登場したのが歴史的構築主義の立場であろう。即ち、歴史の真実や事実は特定の角度から問題化され、特権的に構成された現実には過ぎないという立場である。そして、この構成された「現実」——まさにそのもつともらしさ——をめぐって歴史解釈の闘争が繰り広げられる。

ただこうした歴史を問題化して見る視点は、歴史学内部では言語論的転回以前からある程度の地位を獲得していた。例えば、E. H. カーは『歴史とは何か』⁽²⁴⁾において、客観的な史実や史料を蓄積するのが歴史ではなく、歴史的事実と歴史家の選択と解釈との相互交渉を重視した歴史観を表明している。つまり歴史とは「現在と過去との絶えざる対話」であるので唯一不変の正史や歴史の決定版が存在するわけではなく、絶えず書き直され続ける。⁽²⁵⁾

また「歴史家が用いる言葉それ自体——民主主義、帝国、戦争、革命というような言葉——がその時代の含みを持っているもので、歴史家はこれらの言葉をこうした含みから切り離すことは出来ない」という視座からも明らかのように、言語の恣意性・選択性の問題にかなり注意を払っている。また上記引用の「時代の含み」を「時代の言説」と置換すれば、カーの歴史観は構築主義的な歴史観——とりわけフーコーの系譜学的な歴史観と極めて酷似していると言えるだろう。⁽²⁶⁾

しかし、そうすると歴史家は自分の趣向に合わせて、ある解釈を自分にとっての「真実」として選び取るのか、という歴史相対主義の問題が待ち構えている。それ故に、構築主義や言語論的転回に対して歴史学は、それらが及ぼした認識論的視座（例えばメタ・ヒストリー）に魅惑されつつも、客観的因果関係の解明という歴史学の聖域に爆風が及ぶことには警戒感を持ち、歴史的事実や因果関係それ自体を相対化することに対しては決して全面降伏はしないという微妙な立場を貫いてきた。⁽²⁹⁾ すなわち、言語論的転回——事実と言語により構築され、「どのような言葉で歴史を語るのか」、その選択の中に「歴史を語ることの政治学」が内在している——という発見は有益ではあるが、それを受け入れることは歴

史が完全な虚構であることを意味しない。つまり言語論的転回は既存の歴史学を補完する「有益な遺産の一つ」⁽³⁰⁾というのが最も現実的な評価であろう。

②臨床心理学

臨床領域における社会構築主義は、病をどのように理解するか、そして治療をどのように実践するのかという二つの動機付けに支えられている。その中で近年、注目を集めているのがナラティブ・セラピー論である。ナラティブ・セラピーとは、医師やカウンセラー等の専門家の状況把握・定義権の独占に対して患者の立場からひとまとまりの物語を作り上げその物語を共有するという心理療法である。この様式においては医師と患者が「物語としての自己を構成していく共同作業」の実践が重視され、この自己構成の作業は繰り返し行われる。つまり、物語は語られるたびに更新され、変形される可能性を持っている。⁽³¹⁾

医療行為、すなわち生物学的疾患を確認し、治療を行うという行為には既に定義することの政治学が隠蔽されている。生物学的疾患を直接経験するわけではなく、それが社会的に構築された言説実践を通じて我々は病を認識する。⁽³²⁾この病的社会的構築は、医療社会学の分野では医療化 (medicalization) と呼ばれ、かつて病とは認識されていなかった事象が病氣と認識されること⁽³³⁾によって医療の制度的管轄下で統制される過程を指す。そしてこうした統制過程を批判的にみる視座として構築主義は発展してきた。

③文化人類学

人類学における構築主義の登場は、歴史学と同様に「観察者の特権的なまなざし」を脱構築するポストモダンの転回の局地戦という意味合いが強い。即ち、文化人類学の発展と不可分であった西洋帝国主義の瓦解、旧植民地を出身とす

る人類学者の登場、そして「オリエンタリズム」を中心としたポスト・コロニアル思想、ポストモダン思想の急進的な受容と展開等によって、自己（調査する人類学者）と他者（調査される現地人）の関係性が内外からの批判に晒されている。⁽³⁴⁾ 構成主義の人類学は、文化や伝統及び慣習といった要素がア priori に決定されているのではなく、現在の政治的・文化的なコンテクストによって構成されたものという視座に立つ。⁽³⁵⁾

またこれと前後して実験的民族誌という潮流―調査者の視点を擬似客観化するわけでもなく、自己体験型のフィールドワークの主題化でもなく、調査者と住民との対話を重視したアプローチも生まれてくる。言い換えれば、これは住民の視点（または住民と調査者の対話）から文化という物語を再構成していく作業である。⁽³⁶⁾

要するに歴史学における構築主義が「歴史を本質化する語り」への弾効裁判であるならば、文化人類学における構築主義は「文化を本質化する語り」への異議申し立てであると言える。

（三）身体論

身体をテーマにして社会構築を思考することはどのような意味を持ちうるのか。従来、「身体」とは言語や文化が書き込まれる基盤として考えられてきた。このような立場は性を自明のものとして規定する生物学的本質主義に対しては有効であるが、この立場自体が別の次元で本質主義と合流してしまっている。例えばマナー・タッカー⁽³⁷⁾は言語的構築主義の立場に立ち、言語活動が概念を形成し、性の分化と言語習得は一致している。それ故に一度獲得されてしまった性自認が覆ることはないと言じている。これはまさに、生物学的本質主義を退けているが変わりに文化（言語）本質主義に陥ってしまったことの好例であろう。身体論における構築主義はこのように本質主義と対峙しながらジェンダー理論やクイア理論と合流しながら発展・定着してきた。

以上、社会学とその周辺領域における構築主義の展開を見てきたが、特徴的なことは構築主義という問題系が直接的にも間接的にも「観察者のまなざしの暴露」を想定せざるをえないということであろう。つまり特定の価値や規範・言説が社会的に構築される場合に「何が」「どのように」構築されるのかという課題と同様に、誰がそれを描写し、そこにある種の恣意性が沈殿してしまうのか、という課題を構成主義は避けることができない。

三 国際政治学における構築主義

前節では社会科学における構築主義の展開を俯瞰してきたわけだが、本節では国際政治学に立ち返り、国際政治学における構築主義の展開を整理する。国際政治学における構築主義^③は主に二つの系統に分けることが出来る。ウエントⅡカッチェンシュタインの実証系構築主義とオヌフⅡクラトクウィルのポスト実証系構築主義である。

(一) 実証系構築主義

実証系構築主義はいわゆる第三論争の流れを受け、実証主義とポスト実証主義の対立軸を接合・架橋する手段として登場した。代表的なものはウエントやカッチェンシュタインの社会構築主義である^④。ウエントは国際的無政府状態（アナキー）を、カッチェンシュタインは国家安全保障を構築主義の枠組みから検証した。両方の研究に共通するのは、アイデンティティの概念化を試み、アイデンティティという軸からアナキーや安全保障を検証している点である。しかしながら、彼らの議論はアイデアという新たな分析変数を導入してはいるものの、主たる方法論は行動科学に根ざした実証分析である。言うまでもなく、こういった研究は失敗を運命づけられている。オントロジカル・ゲリマンダリン

グのジレンマを乗り越えられないからである

（二）ポスト実証系構築主義

ウェントとカッツエンシュタインの実証系構築主義に対して、ポスト実証主義の構築主義の代表例はオヌフとクラトクウィルである。⁽⁴⁰⁾ オヌフは国際政治学に構築主義の概念を最初に導入し、哲学と社会理論を交差しながら理論構築を行った。オヌフはスビーチ・アクト・セオリーを援用しながら言語のパフォーマティビティに着目し、国際社会の中で特定の言説にどのように特定の意味が付与されていくのかを分析した。またクラトクウィルは言語哲学に依拠しながら、国際政治上の規範がどのように構築・定着していくのかを分析した。それはルールや規範が合理選択の産物ではなく、間主観性の中で行為者間の間にどのように意味付けられていくのかの考察である。

この二つの構築主義は互いに互いを参照し合う空間を構成してはいたが、お互いに共通の基盤の下で議論するということとはなかった。第三論争の実証主義／ポスト実証主義という対立軸に引きづられてお互いに生産的な対話は起こり得なかった。

こうした学問的な二項対立化を是正したわけではなかったが、キャンベルとコペンハーゲン学派の一連の研究は、ポスト構造主義や言説分析を方法的に強化し、事例研究を行うことで構築主義研究の一つの画期を作り出した。次節では主にキャンベルとコペンハーゲン学派の事例研究について詳述する。

四 国際政治学における言説分析―理論史から事例研究へ

キャンベルとコペンハーゲン学派はどのように言説分析を事例研究に応用したのか。先ずデービット・キャンベルは、冷戦史の文脈でアメリカ外交史を再検証した。その作業は個々の外交言説がどのように内部／外部の論理を強化していったのかの分析である。キャンベルは交渉過程としての「狭義の外交政策[*Foreign Policy*]と、アイデンティティの表象過程としての「広義の外交政策[*foreign policy*]」―或いは「外交」に対する「メタ外交」を区別している。⁽⁴²⁾メタ外交史とは繰り返し設定・再設定される境界の運営と維持である。このアプローチからアメリカ外交史を振り返るならば、アメリカは外交という表象を用いて内部／外部の境界を強化し、アメリカのナショナル・アイデンティティを確立してきた。その境界の表象は「外部に対する脅威」の表象であり、その対象は共產主義であったり、テロリズム・麻薬であったりする。即ち、キャンベルの研究は、非対称化された脅威を形成することによって自国の集団的アイデンティティを強化する手段として外交史を再定義し、その外交言説を再検討したものである。⁽⁴³⁾

バリー・ブザンとオル・ウィーバー達の（いわゆるコペンハーゲン学派）一連の研究は、集団的アイデンティティという視点からヨーロッパの外交を再読解したものである。キャンベルが「広義の外交」と「狭義の外交」区別したように、ブザン・ウィーバーも「狭義の安全保障[*social security*]」と「広義の安全保障[*societal security*]」を区別している。前者が国家のインフラストラクチャー、国民の生命・財産等の防衛であるのに対して、後者は国家の集団的アイデンティティの防衛である。即ち、ヨーロッパという集団的アイデンティティが外交交渉の場でどのように表象され、強化されてきたのかを内部／外部の関係性の中で考察したものである。⁽⁴⁵⁾

このようにキャンベルとコペンハーゲン学派は安全保障や外交といった実証研究が既に多く生産されている領域で事例研究を行い、言説分析の精度を高めていった。これは実証研究とポスト構造主義の接合を思考する上で一つの前提を

用意したものであったと言えよう。次節では構築主義一般の抱える課題に触れながら、実証研究とポスト構造主義の接合について検討していく。

五 構築主義の分析射程—構築するもの・構築されるもの・構築されざるもの

これまでの節では構築主義の流れを社会科学から国際政治学へと俯瞰し、それぞれの問題点を列挙してきた。では構築主義とは如何なる問題を抱え、それはどのように回避可能なものであろうか。構築主義は社会における特定の主題に照射し、その主題が構築される過程に着目する。それ故に、その光が当たり易い部分と、逆にそれによって隠蔽されてしまう部分が不可避免的に存在してしまう。そして、「構築するもの」（構築の主体）と「構築されるもの」（構築の対象）に対して「構築されざるもの」（構築対象外）が存在する。例えば、ウェントの場合アナーキーは国家間関係によって構築されたという議論がある。この場合、「構築するもの」は国家間関係、「構築されるもの」はアナーキーである。しかし、同時に国家関係の枠組みに登らない議論は「構築されざるもの」として初めから除外されている。国際政治学における構築主義は、アイデンティティ研究を基軸に発展してきた。しかし上述のような実証研究はアイデンティティをモノとして捉え、アイデンティティを語ることに政治学（＝排除）に注意を払ってこなかった。

アイデンティティという概念を初めて使ったのはエリクソンである。⁴⁶アイデンティティの用語としての歴史は実は浅い。アイデンティティは「自分が何者であるか」という自己規定であるが、社会的なアイデンティティを考えた場合、「自分が何者であるか」と「自分が何者であるか」と社会（＝他者）が考えているか」の二つの観念を必要とする。そしてこの二つにズレが生じた場合、アイデンティティの危機（二重の不確実性）が現れる。政治学的にアイデンティティを検証する場合、重要なことはアイデンティティが存在するか否かではなく、アイデンティティの語りをを用いることに

どのような政治的効果が内在しているのか―換言すれば「アイデンティティそれ自体が存在するかどうかではなく、アイデンティティについて語る言説実践において何が行われているかである」⁽⁴⁷⁾

アイデンティティの二面性―自己を規定するという肯定的な面と社会から存在証明を求められるという否定的な側面―は国際政治学においては殆ど議論されてこなかった。実証主義のアプローチでアイデンティティを思考する場合には自己同一性としてのアイデンティティのみが着目され、存在証明としてのアイデンティティは殆ど議論されない。しかし、存在証明としてのアイデンティティは政治的カテゴリーを作る。自己と他者の境界を作り、境界内に対しては同質性を、境界外に対しては異質性を強いる。⁽⁴⁸⁾更に言えば、近代とは、「自分が何者であるのかを、脅迫的に問われるようになった時代」⁽⁴⁹⁾。この脅迫的存在証明の中で「構築するもの」と「構築されるもの」が存在し、これらの特権化するが故に生じる「構築されざるもの」の存在に国際政治学における構築主義は無頓着であった。

それ故に、実証研究におけるアイデンティティ分析には大きな欠陥が存在する。それに対して、言説分析を駆使したポスト構造主義的なアイデンティティ研究には権力の「指令モード」を脱構築する視点があるので、こうした「構築されざるもの」を議論の週上に載せることができるのではないだろうか。だが勿論これだけで十分ではない。近年の国際政治学において、実証主義とポスト実証主義・ポスト構造主義の角逐が繰り返し強調されてきた。しかしこの二者は、本当に互いに相いれないものなのであるか。実証系の構築主義者たちは物質／観念の二分法を通常用いる。言うまでもなく、世界は物質と観念により存在するといった二分法は、ある意味で本質主義の陥穽に陥っている。物質や観念が独立した主体として存在するという本質主義である。ラクラウ・ムフの観念論に対する批判―いわゆる「ラディカルな関係主義」はこの種の議論に一つの示唆を与える。即ち、物質と観念においては明確な境界が存在するわけではなく、物質と観念の関係性は言説的に構築される。⁽⁵⁰⁾

しかし、ではポスト構造主義の側に問題がないかと言えばそうでもない。フーコーを出自とする言説分析は、既存の

社会権力を構成するロジック自体は解明できるが、その社会構成のロジックが抑圧体制を再生産する言説権力の悪循環の中で再包摂されてしまうという批判を受けてきた。⁽⁵¹⁾ 即ち、本質主義への対抗言説である構築主義は、意味の想像的共同体を構築するため批判的言説の集合体がそれ自体で一定の規則力を発揮してアプリオリな統一観念を措定してしまう危険性が潜んでいる。換言すれば如何なる相対主義的言説もそれが発話された途端に本質主義的な言明となり得る可能性を内包している。⁽⁵²⁾ 更には構築主義理論が現代の脱領土化・脱中心化されたグローバル資本主義を規範理論の文脈で再強化する支配イデオロギーに過ぎないという批判も存在する。⁽⁵³⁾

これらの点を考慮した場合、本質主義／相対主義という認識論的二項対立を脱構築して、ある程度両者の補完関係に目をむけるべきではないだろうか。実証研究とポスト構造主義は真つ向から対立する議論である、にもかかわらず両者は補完関係にもある。因果関係（なぜ）を追求する説明枠組みと、形成過程（どのように）を分析する理解枠組み比較すれば明らかのように、特定の言説がどのように形成されるかという課題は極めてポスト実証主義的である、にもかかわらず実証主義の論理を完全に放逐しているわけではない。なぜならば形成過程の理解に、因果関係の説明が補完的に必要とされるからである。

実証主義とポスト構造主義のリサーチ・プログラムや理論的妥当性を高めていく手段として両者を接合しようとする動きには一定の評価をすべきではないだろうか（例えば歴史社会学）。ポストモダン歴史学の問題点は、「過去の記述は現在の観点から構築された物語である」という視座から歴史を再説明するため、この枠組みの中から「因果関係」という問題群が抜け落ちてしまっていることにある。⁽⁵⁴⁾ これは言説が社会的な権力／知の関係を構成しているという視点に目を奪われ、原因と結果の関係性を見落としてしまったことの帰結である。⁽⁵⁵⁾ 言い換えれば、言説分析は、そのテキストの背景にどのような権力作用が作動しているのかを読み取るには効果的だが、そもそも「現実」を確定しようとする試みに対しては弱い、或いは達成課題が異なると言わざるをえない。⁽⁵⁶⁾ そうした場合に、実証史学ないし実証社会学的な文脈

と、言説分析的な文体は「往復運動」⁽⁵⁷⁾を繰り返すことによってより精度を高めていけるのではないだろうか。

つまりこうした「文体の往復運動」を繰り返すことによって構築主義研究は完成度を高めていける可能性がある。実証系構築主義は、因果関係の説明には強いが、言語構築の政治性を全く見落としてしまうという問題点がある。逆にポスト構造主義には社会構築過程における権力の恣意性を暴露し、「構築されざるもの」を照射することには効果的だが、そもそも現実を描写するという視点においては脆弱である。それ故に両者を補完的に用いることによって構築主義研究やアイデンティティ研究はその精度を高めていくことができるのである。

この実証主義とポスト構造主義の「文体の往復運動」については最も容易い批判として以下の二つが想定される。一つはそのような往復・接合は果たして可能であるのか、また可能であるとして方法的な一貫性を保ち得るのか。今ひとつは実証主義とポスト構造主義を接合することは結局、権力による再包摂化への道を開き、大文字の「国際政治学」を復活させてしまうのではないか―つまりウェントと同じ徹を踏むのではないか―との批判である。こうした批判に対しては、本稿では応えることが出来ないし本稿の趣旨を超えている為、詳細に論じることが避け将来の研究課題としての。だが、実証的な因果関係の解明とそこに孕む権力／知の脱構築という視座を往復することによって、国際政治学における構築主義やアイデンティティ研究に新たな潮流を生み出すことができるのではないだろうか。

結び

本稿では国際政治学における構築主義研究に着目し、主として実証研究とポスト構造主義の研究を比較しながら両者の接合の可能性を模索した。社会学における構築主義研究を参照しながら、国際政治学における構築主義やアイデンティティ研究を俯瞰して、実証研究とポスト構造主義の二つの流れを検討した。実証研究は因果関係には強いが、アイ

デンティティをモノとして捉えるためにオントロジカル・ゲリマンダリングの問題を回避できない。また、「構築されるもの」から視点を逸らしてしまうという深刻な問題が存在する。逆にポスト構造主義は言説実践における政治性を暴き出すことには強いが、そもそも現実を単純に描写するという課題を前提とはしていない。しかし両者はお互いに相容れないものではなく、補完することができるのではないだろうか。本稿では最終節で両者の長所・短所を捉えながら、その接合の道を探っていった。この接合のプロジェクト（いわゆる「文体の往復運動」）は本稿によって完結するようなテーマではないが、両者の接合によって構築主義研究に「合意ある流れ」を作り出すことの一つの可能性を模索することが出来るのではないだろうか。

- (1) ConstructionismとConstructivismを区別する議論 (Cf. Kenneth Gergen, *Realities and Relationships: Soundings in Social Construction*, Cambridge: Harvard U.P., 1994 (＝永田素彦・深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践』ナカニシヤ出版、二〇〇四年、八七―八九頁)) がある一方で、「構築主義」、「構成主義」など複数の訳語が併存している状況がある。国際政治学にConstructivismを導入したオスフは、その概念的出自として十月革命以後のソ連の芸術運動（所謂、ロシア構成主義）を引いているが、アメリカ社会学の議論を迂回してなぜ敢えてロシアの芸術運動から構築主義（Constructivism）という概念規定を輸入してくるのかが説得的には述べられておらず、彼の構築主義の学説史ないし社会理論への言及は総じて「つまみ食い」的印象が否めない (Nicholas Onuf, *World of our making*, South Carolina: University of South Carolina Press, 1989, p. 36)。本稿ではオスフの用法に依拠しつつ、Constructivism＝構築主義、Constructionism＝構成主義という用語法を採用している。
- (2) オスフは別の論致で、構築主義は社会関係全般を研究対象とするものの一般法則を提示するような「理論」ではなく、社会関係の構築過程を記述するものであると定義している。Nicholas Onuf, "Constructivism: A User's Manual" in Veduka Kubalkova, Nicholas Onuf, and Paul Kowert (ed.), *International Relations in a Constructed World*, New York: M.E.Shape, 1998, pp.58-59.
- (3) この「合意のなさ」故に構築主義はほばあらゆるアプローチからアクセス可能な領域として存在している。その意味で構築主義は「理論的潮流ではなく方法論」（遠藤誠二「国際政治における規範の機能と構造変動」藤原帰一他（編）『国際政治講座4 国際秩序の変動』東京大学出版、二〇〇四年参照）に近く、現在の構築主義の学術的流行のもとでは「構築主義でないこと」は非

常に困難になっている (Niels Andersen, *Discursive Analytical Strategies*, The Policy Press, 2003, p. iv.)。

- (4) 国際政治学におけるアイデンティティ研究としては、本稿第三節を参照。
- (5) 北田暁大「構築されざるもの」の権利をめぐる」上野千鶴子(編)『構築主義とは何か』勁草書房、二〇〇一年、二六〇頁。
- (6) この認識論的二ヒリズムという観点から反实在論とポスト構造主義を混同する議論が非常に多いいわゆるポストモダン批判の多くは、この混同によってポストモダニズムの議論を非常に矮小化している。この種の矮小化のかなり露骨な例としては Terry Eagleton, *The illusions of postmodernism*, London: Blackwell, 1996 (森田典正(訳)『ポストモダニズムの幻想』大月書店、一九九八年)。たとえば「地球は社会的構築物である」とか「世界は実は五分前に作られた」という議論は極端な反实在論の立場に立てば理論的には可能であるが、こうした立場を採るポスト構造主義者はほんの一部に過ぎない。また単に価値の多元性を焦点にするポスト構造主義者も数多くおり、真理の解釈が多元的だからといって真理そのものを否定する必要はないという立場も存在する(例えばラクラウ＝ムフにおける实在 existence と存在 being の区別。Ernesto Laclau and Chantal Mouffe, "Post-Marxism without Apologies," *New Left Review*, No. 166, 1987, p. 85を参照)。つまり認識論的な軸足をどうに置くのかは研究者の立ち居地によって千差万別である。

- (7) 北田、前掲書、二六三頁。
- (8) 盛山和夫『制度論の構図』創文社、一九九五年を参照。盛山はSchützの議論(Alfred Schütz, *Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt*, Springer Verlag, 1932 (佐藤嘉一(訳)『社会的世界の意味構成』木鐸社、一九八二年))を参照しながら、行為者にとっての意味世界／科学者にとっての意味世界を一次理論／二次理論として理論化している。
- (9) 盛山、同右書、一七九、一九五、二〇一―二〇二頁。
- (10) 同右書、二二三頁。
- (11) 中河伸俊「構築主義とエンピリカル・リサーチャビリティ」『社会学評論』第五五卷第三号、二〇〇四年、二四四―二四七頁。
- (12) Michel Foucault, *The Birth of the Clinic: An Archaeology of Medical Perception*, Pantheon Books, 1973, 仏語版は一九六二年。(神谷美恵子(訳)『臨床医学の誕生』みすず書房、一九六九年)
- (13) 高橋順一「戦争と暴力の系譜学」実践社、二〇〇三年、二一八―二一九頁。
- (14) 吉田民人「新科学論と存在論的構築主義」『社会学評論』第五五卷第三号、二〇〇四年、二七六―二七七頁。
- (15) Steve Woolgar and Dorothy Pawluch, "Ontological Gerryandering," *Social Problem* 32.2, 1985.
- (16) 典型的な例として Judith Goldstein and Robert Keohane, (eds) *Ideas and Foreign Policy: Beliefs, institutions, and political change*, Cornell U.P., 1993.

- (17) 中河伸俊『社会問題の社会学』世界思想社、一九九九年、二七八頁。
- (18) 赤川学「言説分析と構築主義」、前掲『構築主義とは何か』、七六頁。
- (19) 北田、前掲書、二六四頁。
- (20) 社会学における構築主義の動向を整理したものとしては千田有紀「構築主義の系譜学」、前掲『構築主義とは何か』を参照。
- (21) Peter Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Doubleday, 1966 (山口節郎訳「日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法」新曜社、一九七七年、一頁)。
- (22) Vivien Burr, *An Introduction to Social Constructionism*, Routledge. (田中一彦訳「社会的構築主義への招待—言説分析とは何か」川島書店、一九九五年、三頁)。
- (23) Malcolm Spector and John Kitsuse, *Constructing Social Problems*, Cummings, 1977 (＝村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太(訳)『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて』マルジュ社、一九九〇年)。
- (24) E. H. Carr, *What is History?*, Penguin, 1961 (清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波新書、一九八七年)
- (25) E. H. Carrと歴史構築主義の親和性については荻野美穂「歴史学における構築主義」前掲『構築主義とは何か』を参照。
- (26) Carr, op.cit., 訳書一四—一五頁。
- (27) Michael Foucault, *The Archaeology of Knowledge*, Routledge, 1972 (中村雄二郎『知の考古学』河出書房、一九九五年)
- (28) 系譜学は、歴史を事実の集積ではなく思想と言説をめぐる解釈の闘争と捉えるが、これは事実関係の確認が不要であるという事と同義ではない。その含意は、事実確認を媒介とした因果関係に着目するあまり、思想形成の節合プロセスが見落とされがちであるという事である(大賀哲「国際関係論と歴史社会学—ポスト国際関係史を求めて」『社会科学研究』第五七巻第三・四合併号、二〇〇六、四七—四八頁参照)。そう考えるとカールの過去の事実と現在の歴史解釈という問題系は、フーコーの系譜学と通底する問題意識を持つこととなる。
- (29) 荻野、前掲書、一五三頁。
- (30) キャロル・グラック(梅森直之訳)「戦後史学のメタヒストリー」『岩波講座日本通史 別巻1 歴史意識の現在』岩波書店、一九九五年、三八頁。
- (31) Sheila McNamee and Kenneth Gergen, (eds) *Therapy as social construction*, Sage, 1992 (野口裕二・野村直樹訳「ナラティブ・セラピー—社会構成主義の実践」金剛出版、一九九八年)
- (32) Susan Sontag, *Illness as metaphor*, Farrar Straus and Giroux, 1978 (富山太佳夫訳『隠喩としての病』みすず書房、一九八二年)
- (33) 野口裕二「臨床のナラティブ」、前掲『構築主義とは何か』、四五頁。

- (34) 中谷文美「〈文化〉? 〈女〉? —民族誌をめぐる本質主義と構築主義」前掲『構築主義とは何か』。
- (35) Jocelyn Linnekin, "On the Theory and Politics of Cultural Construction in the Pacific," *Oceania* 62, 1992, p. 251.
- (36) George Marcus and Dick Cushman, "Ethnographies as Texts", *Anthropology* 11, 1982, pp. 25-69.
- (37) John Money and Patricia Tucker, *Sexual Signatures*, Harrap, 1976 (朝山新一 (訳)「性の署名—問う直られる男と女の意味」人文書院、一九七九年)
- (38) 国際政治学における構築主義の分類について、Maja Zelhus, *Constructivism in International Relations*, Cambridge U.P., 2002, を参照。
- (39) Peter Katzenstein, ed. *The Culture of National Security: Norms and Identity in World politics*, Columbia U.P., 1996; Alexander Wendt, *Social Theory of International Politics*, Cambridge U.P., 1999.
- (40) Friedrich Kratochwil, *Rules, Norms, and Decisions: On the conditions of political and legal reasoning in international relations and domestic affairs*, Cambridge U.P., 1989; Nicholas Onuf, *World of Our Making: Rules and Rule in Social Theory and International Relations*, University of South Carolina Press, 1989.
- (41) David Campbell, *Writing Security: United States Foreign Policy and the Politics of Identity*, Manchester U.P., 1992.
- (42) Ibid. p. 69.
- (43) 類似の趣旨からなされたアメリカ外交史の研究に Roxanne Doty, "Foreign Policy as Social Construction," *International Studies Quarterly* 37, 2003.
- (44) Barry Buzan, Ole Weaver, and J. D. Wilde, *Security: A New Framework for Analysis*, Lynne Rienner Publishers, 1998; Ole Weaver, Barry Buzan, M. Kelstrup, and P. Lemaire, *Identity, Migration and the New Security Agenda in Europe*, Printer Publishers Ltd., 1993.
- (45) 彼らの議論は必ずしも明示的なものとは言い難く、また一貫性に欠けたところもあるが、stateを対象としたものとsocietyを対象としたものとの区別も必ずしも一貫したものではない——更に後者については経済や福祉に関わるsocial security (狭義の社会保障のついでではなく)と集団的アイデンティティに関わるsocietal securityに分けてみる。 Cf. Security: *A New Framework for Analysis*, op.cit., pp. 157, 189; *Identity, Migration and the New Security Agenda in Europe*, op.cit., pp. 46, 99, 120, 131.
- (46) Eric Erikson, *Identity and the Life Cycle*, International University Press, 1959 (=小此木啓吾 (訳)『自我同一性』誠信書房、一九七三年)。

- (47) 伊野真一「脱アイデンティティの政治」上野千鶴子（編）『脱アイデンティティ』勁草書房、二〇〇五年、七二頁。
- (48) 同右書、四三頁。
- (49) 千田有紀「アイデンティティとポジショナリティ」、前掲『脱アイデンティティ』、二二六七頁。
- (50) Laciou and Mouffe, op. cit. 1987.
- (51) 竹村和子「修辭的介入と暴力への対峙」『社会学評論』55(3)、二〇〇四年、一七五頁。
- (52) Diana Fuss, *Essentially Speaking: Feminism, Nature and Difference*, Routledge, p. 119; Gayatri Spivak, "Practical Politics of the Open End" in Harasym, Sarah (ed.) *The Post-Colonial Critic: Interviews, Strategies, Dialogues*, Routledge, 1988, p. 109.
- (53) 櫻村愛子「現代社会における構築主義の困難」『社会学評論』55(3)、二〇〇四年。南山淳「コンストラクティヴィズムと権力／知－アレキサンダー・ウェントを中心に」『筑波法政』第34号、二〇〇三年。
- (54) 北田暁大「ポスト構築主義としてのプレ構築主義」『社会学評論』55(3)、二〇〇四年、二八二頁。
- (55) 系譜学や言説分析の概念自体は因果関係の考察を必ずしも否定するものではない (Raymond Geuss, *Morality, Culture, and History*, Cambridge U.P., 1999を参照)
- (56) 千田、前掲『構築主義とは何か』、三九頁。
- (57) 佐藤俊樹 (1998) 「近代を語る視線と文体」高坂健次・厚東洋輔（編）『講座社会学―理論と方法』東京大学出版、一九九八年、九一―九二頁。